

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

A Survey of University Contributions to Local Communities through Sport: Based on Questionnaires for the Kaetsu University “Kaetsu Housewives” Volleyball Cup

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星, ひろみ メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/921

研究資料

スポーツを介した大学の地域貢献に関わる実態調査

～ 嘉悦大学「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」
におけるアンケート調査を基に ～

A Survey of University Contributions to Local Communities through Sport:
Based on Questionnaires for the Kaetsu University
“Kaetsu Housewives” Volleyball Cup

星 ひろみ
Hiromi HOSHI

<要約>

嘉悦大学は「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」（以下「嘉悦杯」とする）を30年間継続して開催し続けてきた。小規模ながら大学の人的資源および物的資源を有効に活用して行われる本大会についてその歩みを振り返ると、確実に地域社会に根付き、「人的資源・施設開放型」のスポーツによる地域貢献を果たしてきたといえる。このことを検証するため、筆者は30年目の節目に当たり参加者へのアンケート調査を実施した。その結果、規模が小さくとも、継続性を有することで、参加者である地域住民に高く評価されるスポーツによる大学の地域貢献が可能であることが示された。さらにアンケート結果の一部を、スポーツ庁の「第2期スポーツ基本計画」のデータと比較すると、「嘉悦杯」に集まるママさんバレー競技者は、明らかに全国平均よりもスポーツ実施率が高く、加えて、参加者の家族や子供のスポーツ習慣に影響を与えていることを確認することができた。

<キーワード>

嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会、嘉悦杯、ママさんバレー、スポーツによる地域貢献、スポーツ基本計画、人的資源、物的資源、継続性、成人女性のスポーツ実施率、子供のスポーツ習慣

1 はじめに

2006年（平成18年）12月に教育基本法が改正され、第7条では、大学の役割として、大学の教育や研究の成果を広く社会に提供することを新たな役割とし、教育と研究に加えて社

会貢献が重要だとしている。それ故、近年多くの大学が地域貢献に取り組み、大学を地域の貴重な資源として連携・協力を行っている。たとえば、産官学の連携・協力で「まちづくり」¹⁾を目指すという大学もあるだろう。さらに「まちづくり」という地域貢献にスポーツは利用しやすい。なぜなら、スポーツやスポーツイベントを地域活性化・まちづくりと強く結びつけることができるからである。堀 (2007) は著書の中で「地域が行うスポーツやスポーツイベントの企画・運営の検討時には、まちづくり・地域づくりを視野に入れて行うことが大事」としている (p.3)。

しかしながら、すべての大学がその規模で地域貢献ができるかという現実はそう容易くない。大学の規模や、大学が有する人的資源、物的資源によっては困難なことが多々あるからである。そこで考えられるのが、大学の有する人的資源、物的資源を有効に活用し、行う地域貢献である。自分たちの大学の有する人的資源、物的資源が豊富でないからと地域貢献、あるいは地域交流を断念したり、無理をして短期で終了してしまうような地域貢献よりも、各々の大学が可能な範囲で行い、地域に根付かせるためにも継続的に行える地域貢献こそが肝要である。渡 (2012) は、大学によるスポーツを通じた地域連携は「大学運動部支援型」と「人的支援・施設開放型」もありうるとしている (p.99)。大学による指導者やボランティアの派遣の人的な支援と活動の場を提供する大学施設の開放といった支援である。

筆者が所属する嘉悦大学では「嘉悦杯」を30年開催し続けている。星 (2007) が「嘉悦杯」について述べているように、はじめは嘉悦大学を地域住民に理解してもらうところからスタートした大会だが、嘉悦大学の人的資源、物的資源を最大限利用してきたことで30年継続でき、バレーボールを愛好する地域住民に受け入れられることとなった (p.117)。大学のクラブにおいても女子バレーボール部を強化している大学であり、さらに1986年に竣工した「嘉悦記念体育館」は特にバレーボール競技が行いやすいよう配慮してつくられた体育館である²⁾。つまり、嘉悦大学にとっては、バレーボール部とバレーボールに適した施設が地域に提供できる資源ということになる。さらに、毎年、大会を開催するための予算、運営を支援してくれる大学の理解も重要である。大会の規模としては決して大きくないが、この大会に参加したいと思ってもらえるように大会運営も工夫し³⁾、大会に参加することで得をしたと思われるよう仕掛けを準備する。その結果、地域の方々が是非その大会に出場したいと思うようになり、次回の大会開催も期待する。このような工夫も試みながら、確実に継続してきている。

本稿では、30年たった現在でも、参加者（地域住民）に期待される大会、継続を望まれる大会であるかを確認するため、2016年に開催された「嘉悦杯家庭婦人バレーボール30周年記念大会」を機に、参加者へアンケートを実施した。この調査により、あらためて大会の規模として小さく、地域交流の一つとみられがちなイベント（大会）も、毎年必ず行われることで、競技者が出場したい、勝ちたいと意欲が湧いてくることになり、その結果、「ママさんバレー」⁴⁾を愛好する地域住民から期待される大会になることが確認できた。

2 30年を迎えた嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会

1986年から始めた嘉悦大学主催の「嘉悦杯」も2016年11月に30周年を迎えた⁵⁾。20周年記念大会の際も、22年目にアンケートをまとめているが(星2007、pp.122-128)、嘉悦大学と近隣住民との交流から30年が経ち、「嘉悦杯」について地域住民の視点から見てその位置づけに変化があったのか。それとも、変わらずスポーツによる地域貢献を果たしているのか現状を見極めるためにもアンケート調査を行った。

大会スタート時より、試合運営等の方法については大きく変えていない。ただし、当初はまだ【協力】と記載されていなかった、「多摩バレーボール連盟」「小平市バレーボール連盟」「小金井市バレーボール連盟」を平成23年以降正式に明記することになった。実際には、大会スタート時より役員の方々の運営協力があったので、内容としての違いはない。また、嘉悦杯役員の中に、「公財）東京都バレーボール協会」「東京都ママさんバレーボール連盟」「関東ママさんバレーボール連盟」「(社)全国ママさんバレーボール連盟」に所属する方がいらしたので、東京都23区からの出場チームの選出や審判についてご協力いただいた。

本大会の嘉悦大学側の「担当」として体育系の専任教員が携わってきたが、実際に学内組織に組み込まれた担当職ではない。しかし、そのほうが、頻繁に担当が変わることがないため、無駄な時間・人数をかけずに運営できる利点となった。

嘉悦学園、嘉悦大学では毎年変わりなく、主催者として「地域連携」関連の予算を組み、同窓会組織「光風会」からも協賛いただいている。その支援があって大会継続が可能となる。大会予算は、表彰(レプリカ・メダル・賞状)、用具(ボール)を用意する費用なので、毎年、一定の予算で実施することが可能である。

2.1 嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会 30年の功績

2.1.1 22年目までの記録(1986年～2007年)

嘉悦女子短期大学が小平市花小金井キャンパスに移転した当時、近隣住民に大学の移転についての理解を得られるよう、地域との交流に取り組もうとしてきたが、真っ先に話が進んだのはスポーツにおける地域交流だった。それが「嘉悦杯」のスタートである。もともと東京の多摩地区は家庭婦人バレーボール⁶⁾が盛んということもあり、大学周辺の住民にも家庭婦人バレーボールを行っている方が多かった。そして、嘉悦大学(当時、嘉悦女子短期大学)も短期の女子大学でありながら、関東大学バレーボール1部リーグを維持して⁷⁾、「バレーボールの強い短大」と大学周辺の住民には知られていた。そういった要因が重なって実現した大会であった。

表1のとおり、1986年、最初の開催時には参加チームは小平市、小金井市、保谷市(現在は田無市と合併し西東京市)⁸⁾の3市であったが、翌年には、東村山市を入れた4市に増えている。さらに3年目には7市、4年目には8市、5年目には10市というように確実に参加地域が広がっていった。嘉悦大学の体育館のキャパシティから、参加チーム数は12チームと

して、これを増やすことはできなかったのだが、実は参加チームにとっても負けたらすぐ終わりのトーナメント制よりも1試合でも多く試合をしたいという声が大きかったことから、予選リーグ(3チームによるリーグ戦)の決勝トーナメントの方法を取り入れている(必ず2試合はできる)。また、普段なかなか試合ができない地区、地域との対戦ができるということで、着実に参加希望が増えていった。そして、1986年から2007年までには37地区<東京の24市町・9区および埼玉県1市(連合チーム1は入れない)>、延べ270チームが大会に参加し、開催当初に比べると20倍もの参加数となった(星2007、pp.120-122)。

2.1.2 30年に向けてさらなる飛躍(2008年~2016年)

これまでの20年で、「嘉悦杯」に出場したいとの要望が増え、さらにその範囲(地域)が年々広がっていった。中には埼玉県ではあるが西東京市と隣接する新座市であったり、千葉県船橋市に住む嘉悦女子短期大学時代の卒業生から、チームで参加したいという要望があったりと、嘉悦学園創立110周年(平成25年)の大会を「記念大会」として開催する際に声をかけた。それらを含めて、参加チーム数は延べ108チームである。1986年から2016年で参加チーム地区範囲が東京24市町・12区および埼玉県1市、千葉県1市まで広がり、延べ合計378チームが大会に参加している。

表 1 嘉悦杯家庭婦人バレーボール 市・区参加チーム数の推移 (1986年～2016年)

大会回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30					
年	61	62	H1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	PS	19	20	PS	21	22	23	PS	24	25	PS	26	27	28	
1 小平市	4	3	3	3	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	1	1	2	1	1	2	2	1	1	2	1	1	2	2	1	67
2 小金井市	4	3	2	1	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	38	
3 保谷市	4	4	3	3	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	49	
4 田無市		1			1	2					1				*	西	東	京	市	⇒	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10		
5 東村山市	2						1					1	1	1	1	1			1					1	1								5		
6 多摩市		1	1			1						1																					1	5	
7 調布市		1				1											1										1		1					5	
8 府中市		1			1	1				1							1				1				1	1	1	1			1	1	1	13	
9 狛江市			1	1																											1			3	
10 日野市			1			1		1	1	1	1	1					1	1							1									9	
11 三鷹市			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1										1		1	1				13	
12 東久留米				1		2	1					1	1	1	1	1	1							1		1					1			11	
13 武蔵野市				1		1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	26	
14 日の出町				1						1							1																	3	
15 国立市						1							1	1	1												1							4	
16 国分寺市			1		1	1	1	1	1	1			1	1	1		1	1					1		1	1					1			15	
17 立川市					1			1	1	1	1	1						1				1		1	1	1	1		1		1	1	1	14	
18 昭島市						1		1	1	1		1						1						1	1			1			1			9	
19 国立市						1																												1	
20 八王子市						2						1											1		1		1		1		2			9	
21 東大和市						1						1												1										3	
22 町田市						1																												1	
23 青梅市							1	1			1												1	1		1			1					7	
24 清瀬市					1											1																		2	
25 武蔵村山																											1							1	
多摩連合																							1											1	
26 世田谷区				1		1										1										1								4	
27 杉並区			1		1						1		1		1	1							1		1	1	1			1	1	1		12	
28 練馬区				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1							1		1	1							13	
29 板橋区																								1						1	1	1			4
30 中野区					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1															1			11	
31 新宿区					1						1																1							3	
32 豊島区																	1									1								2	
33 渋谷区																																			
34 北区																				1			1											2	
35 目黒区																				1														1	
36 大田区																											1							1	
37 江戸川区																												1	1	1				3	
38 新座市																		1																1	
39 船橋市																												1				1		2	

- ・ 網掛けは記念祭、PSは「パールシニア大会」の略。
- ・ 昭和63年は昭和天皇のご容態を鑑み、途中まで準備は行われていたが、大会は見送ることとなった(昭和64年1月7日御崩御)。
- ・ 2001年(平成13年)に保谷市と田無市が合併し、西東京市が発足する。
- ・ PS 創立105周年祭、大会25周年、創立110周年祭。
- ・ 平成28年度30周年記念大会は過去10年の優勝・準優勝チームが参加。
- ・ 3区(東京)1市(千葉県)が加入(※網かけ)。

【小計】
 1986(昭和61)年～2007(平成19)年 270チーム
 2008(平成20)年～2016(平成28)年 108チーム

【総合計】
 1986(昭和61)年～2016(平成28)年 378チーム

3 スポーツ基本計画の数値目標

3.1 スポーツ基本計画とは

今回のアンケート結果の一部と比較したいデータとして「スポーツ基本計画」がある。

2011年（平成23年）、日本のスポーツの在り方に関する法律が50年ぶりに改正された。それを「スポーツ基本法」という。その第9条に「文部科学大臣は、スポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、スポーツの推進に関する基本的な計画を定めなければならない。」とある。これに基づき2012年（平成24年）に策定されたものが「スポーツ基本計画」⁹⁾である。「スポーツ基本計画」の序文に「スポーツは青少年の健全育成や地域社会の再生、心身の健康の保持増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上等国民生活において多面にわたる役割を担うとされている。（中略）ここにスポーツ基本法第9条の規定に基づき、スポーツの推進に関する計画（スポーツ基本計画）を策定する。」と書かれている（「スポーツ基本計画」はじめに）。

平成24年3月に策定した「第1期スポーツ基本計画」（以下「第1期計画」）は10年間（平成24年から平成33年）を通じた基本方針を持ち、平成24年度から5年間にどのように具体的な施策に取り組んでいくか、客観的な到達目標を明らかにしつつ現状と課題の分析がなされた。「第1期計画」では7つの政策目標に基づき施策を推進した。結果、子どもの体力の低下に歯止めをかけたなどの成果のある一方、スポーツ実施率などに課題が残った。そこで、「第2期スポーツ基本計画」（以下「第2期計画」）として平成29年度から平成33年度までの計画が新たに策定される予定である。

3.2 スポーツ基本計画の数値目標「成人のスポーツ実施率と子供の体力等」

「第2期計画」の参考データ集から「第1期計画」の5年間（平成24年～28年）の「成人の週1回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移¹⁰⁾」をみると、以下の4点が指摘されている。

- a. スポーツ基本計画「成人の週1回以上のスポーツ実施率が65%程度、週3回以上のスポーツ実施率が30%程度となることを目指す」とあるが、平成28年度の成人のスポーツ実施率（週1回以上）は42.5%であった。
- b. スポーツ未実施者の割合は32.9%である。1年に1回もスポーツをしておらず今後もするつもりのない者の割合は27.2%（平成28年度）。
- c. 成人の週1回以上のスポーツ実施率を性別・年代別に見ると、20～40代が低く、特に女性が低くなっている（週1回以上28.2%）。
- d. 一方で50代以降は年代が高くなるにつれて実施率は上がり、男女とも70代の実施率が最も高くなっている。

さらに、「第2期計画」の子供の体力等についての施策目標に「自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う生徒」を80%にすること（平成28年度58.7%）、「スポーツが嫌い・や

や嫌いである生徒を半減することを目指す。」(平成 28 年度 16.4%→8%) といった目標が増えている¹¹⁾。

「第 1 期計画」が制定される 10 年ほど前から成人のスポーツ実施率は 40%台を維持しており、平成 28 年に 42.5%に上がったものの、目標値の 65%には程遠い数値であった。次の 5 年間「第 2 期計画」で 65%まで引き上げることもまた、容易でないはずである。子供の体力等の数値目標も同様に高いものであることは間違いない。

この「スポーツ基本計画」により示された具体的な数値を参考に、「嘉悦杯」のアンケートで得た一部結果を比較してみたい。

4 嘉悦大学の地域貢献についてのアンケート

2016 年に開催した「嘉悦杯家庭婦人バレーボール 30 周年記念大会」を終えて、大会参加者 150 名にアンケートを実施した(回収 149/150)。アンケートでは「嘉悦杯」の参加者にとって嘉悦杯、ないしは嘉悦大学が地域貢献をはたしているかを主題として調査している。特に 30 年という大会の継続性についても調査し、22 年目の調査(星 2007)との比較を試みた(pp.122-128)。さらに、今回のアンケートでは、年齢とママさんバレーの活動歴、さらにその家族のスポーツへの影響についても調査した。下記の「スポーツ基本計画」の答申にある参考データ「成人の週 1 回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移」¹²⁾の一部を取り上げ、今回のアンケート結果と比較してみることとする。アンケート対象が「嘉悦杯」参加者と限定されているが、今後の問題提起の一助になると考える。

【成人のスポーツ実施率】

- ・成人の週1回以上のスポーツ実施率を性別・年代別に見ると、20～40代が低く、特に女性が低くなっている(週1回以上28.2%)。
- ・一方で 50 代以降は年代が高くなるにつれて実施率は上がり、男女とも 70 代の実施率が最も高くなっている。

【子供のスポーツ習慣】

- ・自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う生徒を 58.7% (平成 28 年度) から 80% にすること。
- ・スポーツが嫌い・やや嫌いである生徒を 16.4% (平成 28 年度) から 8%まで半減したい。

4.1 嘉悦杯家庭婦人バレーボール 30 周年記念大会アンケート調査結果概要

4.1.1 「嘉悦杯」年齢別参加者の区分

図 1 のように 149/150 名中の回収で、今回の「嘉悦杯」は 30 歳代から 60 歳代の出場が中心である。特に、40 歳代の出場が 65 名と最も多く、続いて 50 歳代の 35 名、60 歳代の 16 名、30 歳代の 13 名となっている。今回 20 歳代の出場は見られなかった。70 歳代の回答はなかったが、68 歳という回答も 2 名ほどみられた。また、過去の大会に 20 歳代・70 歳代の出

場があることは追記しておきたい。実際に、家庭婦人バレーボール大会（大会によってはママさんバレー大会）では50歳代・60歳代のための年齢別の大会がよく行われている。「いそじ大会」（50歳以上）、「ことぶき大会」（60歳以上）の他にも、最近では70歳以上の大会も行われている¹³⁾。「嘉悦杯」でも「パールシニアの部」として50歳以上のクラスを何度か開催している。このようにママさんバレーのプレー人口は非常に年齢の幅が広い。

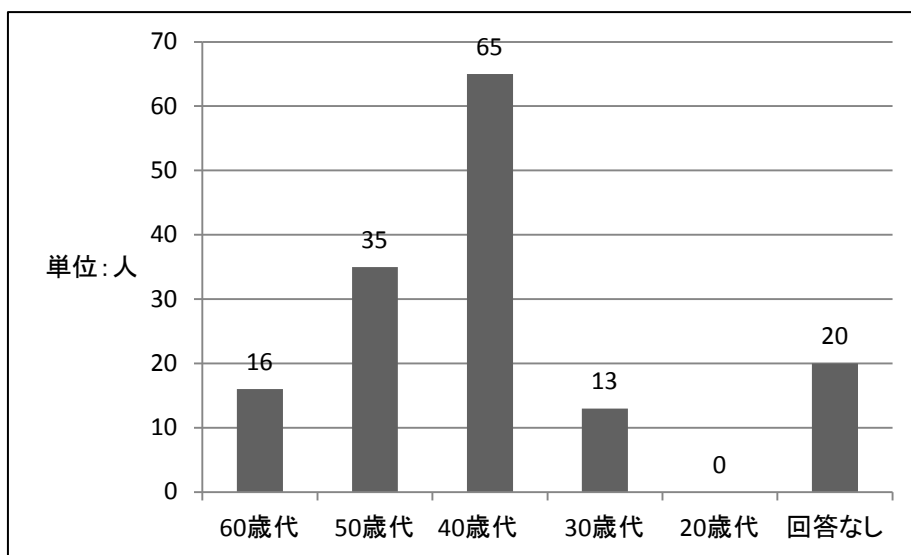


図1 嘉悦杯 年齢別参加者の区分（30周年記念大会 2016）

4.1.2 ママさんバレーボール経験年数

次に図2を見ると、年代別ママさんバレー歴がわかる。60歳代の方々は20～40年とバレーボール歴がとて長い。50歳代についても10～30年、40歳代で5～25年、30歳代で5～15年であった¹⁴⁾。どの世代にもバレー歴の長い者がいるのが特徴ともいえる。たとえば、妊娠・出産などで一時休んでいても、再び復帰して続けている方々が多い。ママさんバレーは「9人制ルール」を適用している。このルールはローテーションがなく、守備に専念できるポジションがあるので、年齢と体力面の問題も解決し易い。さらに、ママさんバレーのネットの高さは2m5cmと9人制一般女子の2m15cmよりも10cmも低い¹⁵⁾。結果、ママさんバレーは年齢層も幅広く、経験年数も長くなる。健康であれば60歳、70歳になっても続けられる状況を作りだしている。

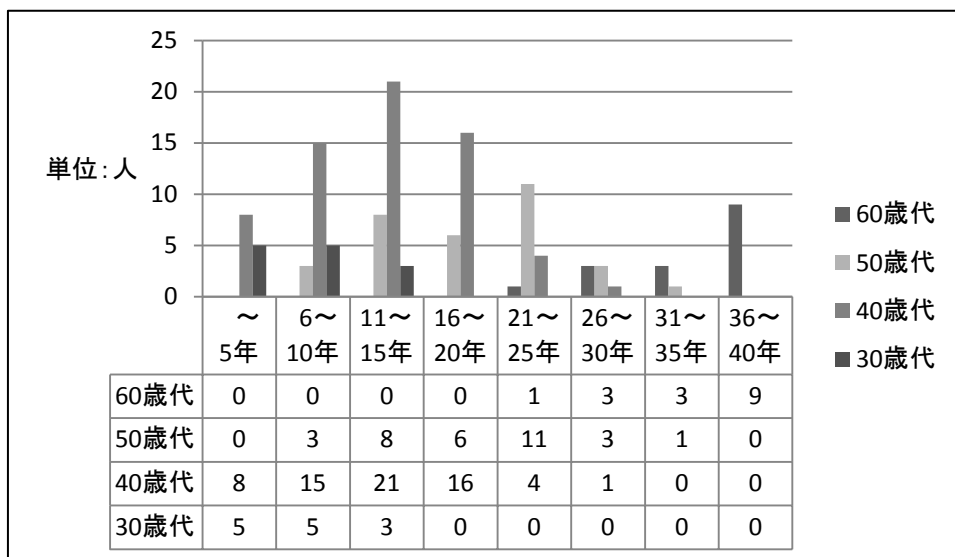


図2 年代別「ママさんバレー」の経験年数 <30～60歳代> (2016)

4.1.3 「嘉悦杯」に参加した感想

次に、30周年記念大会の参加の感想を尋ねた結果を示す。

a. 大会への参加が充実していたかどうか

図3のとおり「大変充実していた」、「充実していた」を合わせて約97%であった。

「わからない」との回答はあるものの、「充実していなかった」との回答はなかった。

b. 大会に参加して楽しかったかどうか

同じく図3をみると「大変楽しかった」、「楽しかった」を合わせて約94%であった。

aの数値同様、高い数値を示している。

「どちらともいえない」「その他」の中には、「緊張してしまった」「審判を間違えないようにやらなければならない」などのプレッシャーを感じてしまったという意見があった。今回は30周年の記念大会ということで、この10年の優勝、準優勝のチームに出場してもらった。一つ一つの試合が接戦であり、審判をする方は、非常に緊張したと思われる。出場者の中には自分の試合より、審判で苦勞した方もいたようだ。プレー面でも、当然、勝敗を意識するチーム・選手は試合そのものに緊張していてもおかしくはない。

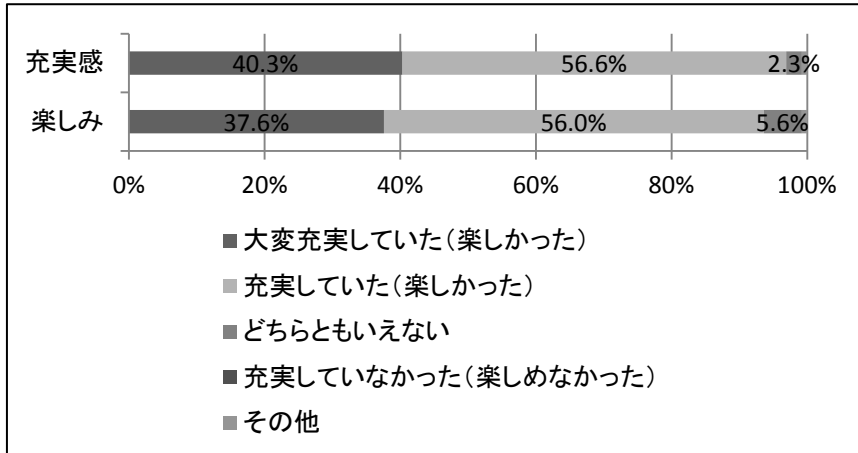


図3 「嘉悦杯」参加の感想【充実感】・【楽しみ】(2016)

4.1.4 大会運営の工夫（特長ある大会を目指して）

「嘉悦杯の良いところは何だと思いますか？」と質問したところ、図4のような結果がでた（複数回答可）。

「遠方のチーム、普段試合ができないチームと対戦ができて嬉しい」が一番多かった。次に「いろいろなチームをみて勉強になる」や「レベルの高いチームが集まり勉強、励みになる」といったように、上位回答は参加者が競技者としてとても高いモチベーションを持っていることを表している。

「嘉悦杯」は本来、「交流」を目的に運営されてきたのだが、30年もの継続で地域に定着してきたので「大会に出場したい」「優勝して優勝カップを持ち帰りたい」と思うチームも増え、いわゆる勝敗を意識する「強いチーム」の参加が増えている。しかし、それはただ単に勝ちたい、弱いチームに勝って喜ぶのではなく、強い相手に挑戦したいという、前向きな気持ちであるようだ。いつも同じ地域で、良く知ったチームと試合を続けていると、ただ試合に勝つことのみが目標になってしまいがちだが、日ごろ中々対戦できないチームと試合をすることで、プレー、戦術、審判の技術などを学ぼうという高い向上心が養われる。「嘉悦杯」に出場すると、このような経験ができると競技者の中でも広まっている。まさに30年の中で競技者の高いモチベーションが培われ、そしてそれが大会の特長となっている。

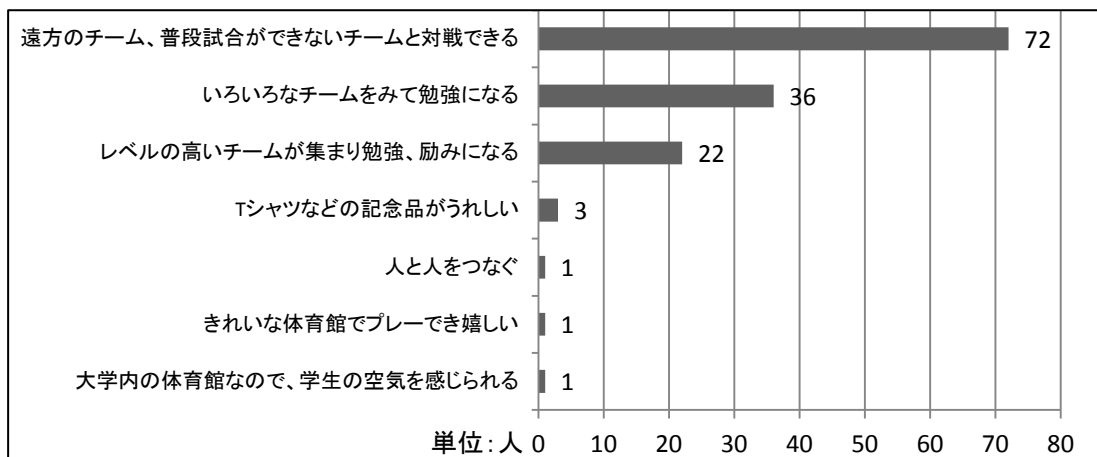


図4 参加者からみた「嘉悦杯」のメリット (2016)

<優勝杯>

「嘉悦杯」の継続の証として、優勝杯の授与・返還がある。これは大会終了後の表彰式で優勝杯の授与を行い、1年間そのチームに預け、チームで保管してもらう（競技スポーツでは当然のセレモニーである）。小学校の表彰用ケースなどに優勝杯を保管して、誰もが見えるようにしているチームもあると聞く。そして、次の年の開催時に「優勝杯返還」という開会式の一つのセレモニーとして返却してもらう。返却に対し、レプリカ授与があるので、記念の盾（あるいはトロフィーなど）はチームに残る。その優勝杯の柄の部分には30年分の優勝チーム名が記してある表彰リボンが結ばれている。

優勝カップやそれに付随するセレモニーが競技者にとっては名誉に感じるものなので、こういったことが大会の継続性を高めているのかもしれない。同様に、勝敗を意識するチームが増えることも当然のことと思える。

4.1.5 「嘉悦杯」の継続性からみた満足度

「嘉悦杯」の継続についての問いでは、30年の継続をどう思っているか質問した。結果は図5のとおりである。30年の継続を評価する回答が最も多く、さらに主催者や、担当教員、バレーボール部員に対し、労いの言葉もあった。主催者側にとっては励みになる評価である。

通常、地区レベルのママさんバレーの大会では、試合前の準備や試合後の片付けを参加者が担うのは当たり前だという。この「嘉悦杯」では前日の準備、当日早朝準備から試合終了後の片付け、試合中の業務など、試合の審判（主審・副審）以外は、担当教員とバレーボール部員がすべて行うので、よりその点に感謝されたのだと思う。参加費もなく、自己の負担も少なく、試合自体に集中できれば、選手は充実し、楽しい大会と感じ、「さらなる継続を望む」大会になるはずである。

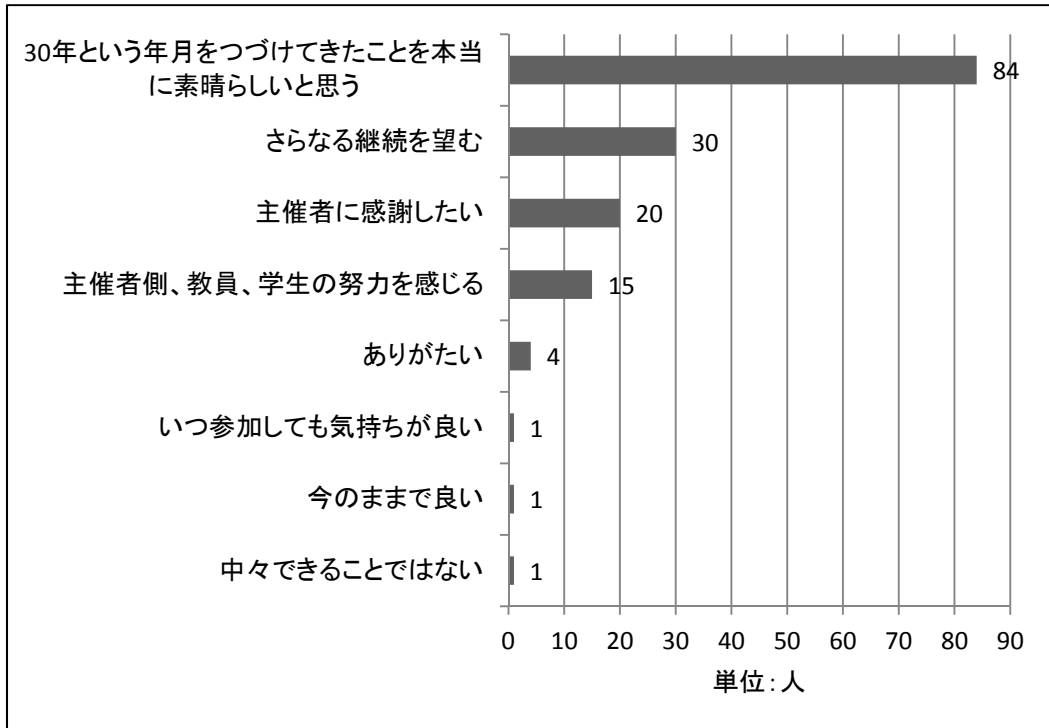


図5 「嘉悦杯」の継続性からみた満足度 (2016)

4.1.6 嘉悦大学のスポーツによる地域貢献度

次に、この「嘉悦杯」を主催する嘉悦大学がスポーツによる地域貢献を果たしているかという問いにも、「大変貢献している」(44.6%)、「貢献している」(50.8%)、「どちらともいえない」(2.3%)、「貢献していない」(0.0%)、「その他(わからない)」(2.3%)という結果であった。「大変貢献している」と「貢献している」で約95%の回答であった。嘉悦大学がスポーツを通して地域に貢献していると評価された。

大会協力をいただいている、「多摩バレーボール連盟」「小平市バレーボール連盟」「小金井市バレーボール連盟」そして「武蔵野市バレーボール連盟」より、「嘉悦杯」が30年の功績を認められ表彰された¹⁶⁾ことを付言しておく。これらバレーボール連盟は、毎年「嘉悦杯」の運営協力と参加チームの選出を行ってくれているので、身近で「嘉悦杯」の歴史と存在価値を評価してくれたといえる。

4.1.7 「嘉悦杯」を継続する嘉悦大学の地域貢献度

「嘉悦杯」の継続は地域貢献になっているかとの問いに対し、「大変貢献している」(36.7%)、「貢献している」(59.4%)、「どちらともいえない」(1.6%)、「貢献していない」(0.0%)、「その他(わからない)」(2.3%)という回答を得た。

出場者のほとんど(約96%)が、「嘉悦杯」の継続はスポーツによる地域貢献に値すると

評価している。年1回の大会ではあるが、必ず毎年秋に実施される大会だと認知され、優勝・準優勝・第3位まで表彰もされるので評判が評判を生むようになった。このことも、「嘉悦杯」に是非参加したいと思われている要因の一つである。

4.1.8 今後「嘉悦杯」に期待すること

「嘉悦杯に今後期待することは何か」の問いに、**図6**のように「さらなる継続を望む」が一番多かった。続いて「また参加したい」、「バレー部との試合などで交流を行いたい」が複数あった。「継続を望む」、「また参加したい」という声は**図3**が示す、「充実していて、楽しい大会」とも符合する。運営協力をしている嘉悦大学女子バレーボール部と試合をしたいとの意見が複数あったが、これは、バレーボール部の学生と交流を持ちたいとか、大学バレーで実力を発揮しているチームと試合をしてみたいという参加者の向上心の高さを表している。

嘉悦大学女子バレーボール部は大学バレーの中では、とても伝統のあるバレーボールチームである。嘉悦大学が短期大学のころより、学園・大学がバレーボール部への支援をしてきていた。この「嘉悦杯」がスタートする頃も「関東大学バレーボール1部リーグ」にいたので、バレーボール好きのママさんたちに、いつも応援していただいていた。その部員が大会の手伝いをするというので、「嘉悦杯」出場者には喜んでいただけたのだろう¹⁷⁾。

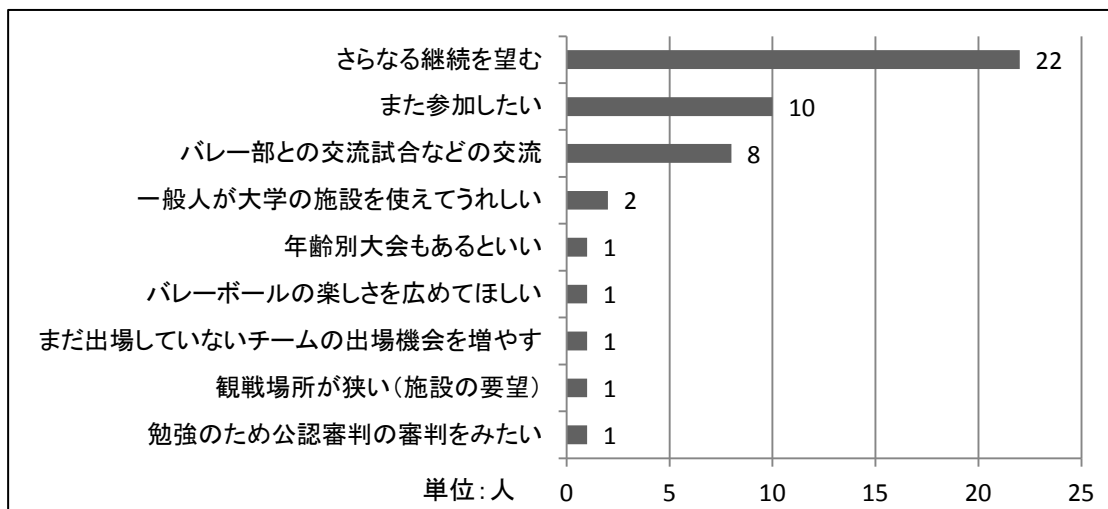


図6 今後「嘉悦杯」に期待すること (2016)

4.2 母親(ママさん)とその家族について

4.2.1 母親(ママさん)のスポーツ習慣とご家族(夫・子供)への影響

これについては**図7**のとおり、「影響している」(48.6%)と「大変影響している」(23.6%)とを合わせて7割を占めている。以下「どちらともいえない」(17.6%)、「影響していない」(9.5%)、「その他」(0.7%)という結果であった。「定期的に運動を続け、大会などに積極的

に参加する習慣のある母親を持つと、家族にも影響を与える。」可能性を示した。しかし、今回は「嘉悦杯」参加者で、「ママさんバレー」を行っている方々に限定しているため、もう少し幅広く対象を広げた調査の必要がある。

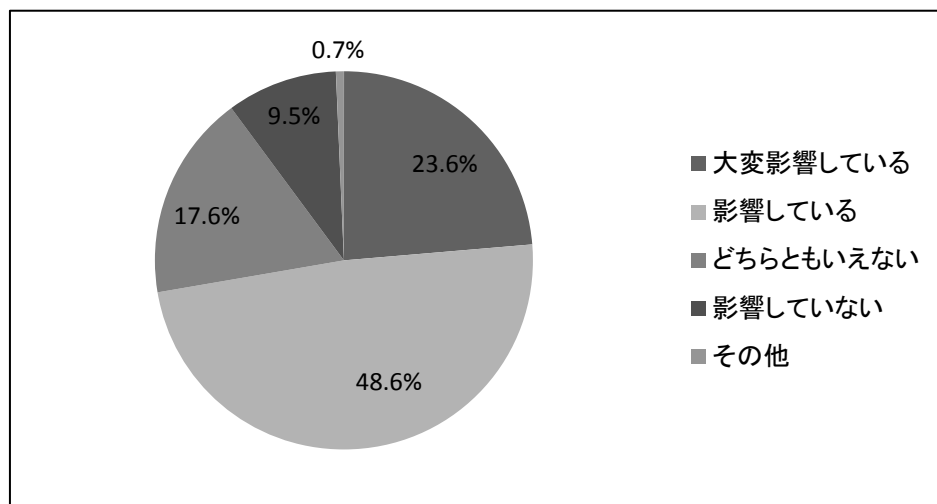


図7 自身のスポーツ習慣が与える家族への影響 (2016)

4.2.2 健康のために家族にもスポーツ（運動）を行ってほしいか

自分自身が定期的にスポーツを行っている、健康のために家族にもスポーツや何かしらの運動をしてほしいと期待するものなのであろうか。今回の「嘉悦杯」参加者で「ママさんバレー」を定期的に行う方々の回答は、「そう思う」(52.3%)と「強くそう思う」(34.2%)を合わせれば約9割近く、家族にも健康のためにスポーツや何らかの運動をしてほしいと期待していることがわかる。今回の「嘉悦杯」の参加者は「ママさんバレー」を定期的に続けていて、かつ経験年数も比較的長い(図2参照)母親へのアンケートなので、健康のためにスポーツ(運動)をすることの必要性を身をもって感じているのだと推察できる。

4.2.3 母親(ママさん)が運動する子供のスポーツ体験

自分の子供たちがどんな運動をしているか質問してみた。今回は年齢別、性別などを問わず、子供が運動していれば、その種目を明記してもらった(複数回答286件)。

結果、図8のように「バレーボール」が62件、「サッカー」44件、「バスケットボール」43件、「野球」27件、「水泳・スイミング」26件(合計202/286件)で7割を占めている。

「バレーボール」62件というのは、近くで母親のプレーする姿を見ている「親の影響」と、子供にとっても「バレーボールが行いやすい環境」があると考えられる。

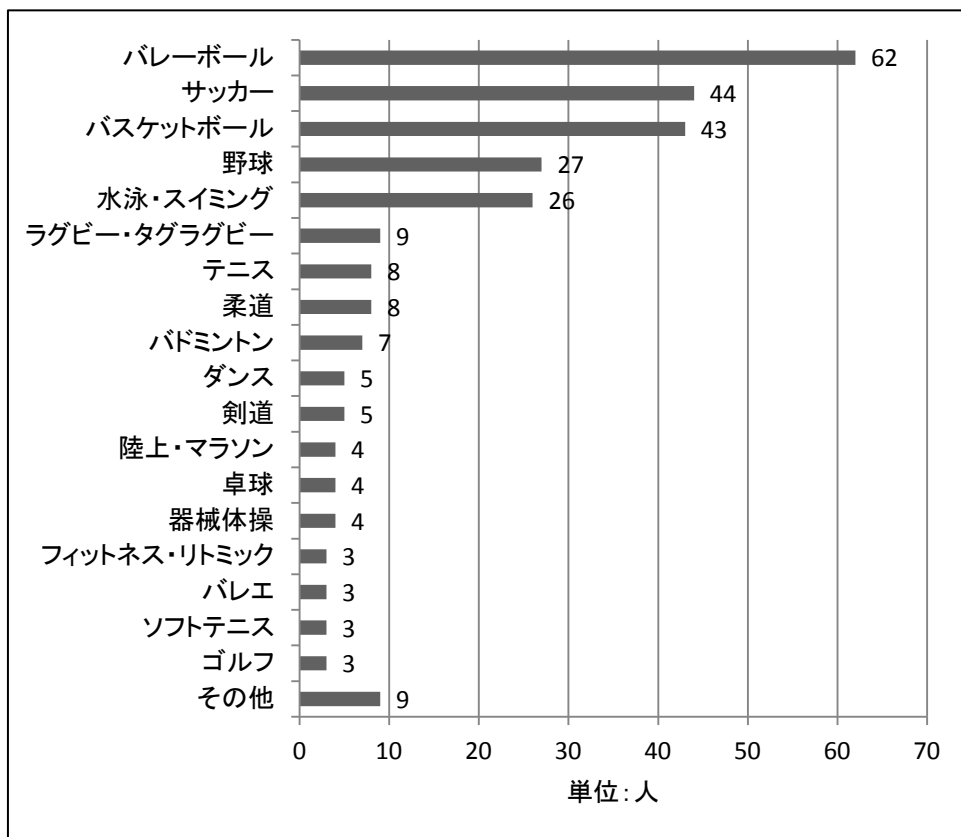


図8 子供たちのスポーツ体験 (2016)

4.3 アンケート結果と「第2期スポーツ基本計画」との比較

4.3.1 成人のスポーツ実施率について

アンケートの結果を3.2の「スポーツ基本計画の数値目標」で示した4つのポイントと比較してみると、

- ・aの成人の週1回以上のスポーツ実施率の目標値が65%程度である点からすると、今回の「嘉悦杯」の参加者は週1回以上の練習・試合を行っているので、65%以上の実施率であり、目標値に達している。
- ・cの成人の週1回以上のスポーツ実施率を性別・年代別に見ると、20歳代、30歳代、40歳代が低いことがわかる。

「世代別・性別スポーツ実施率（週1回以上）」【女子】

- | | | |
|---|--------|-------|
| ① | 20～29歳 | 28.0% |
| ② | 30～39歳 | 27.7% |
| ③ | 40～49歳 | 29.0% |
| ④ | 50～59歳 | 42.4% |

⑤	60～69 歳	55.6%
⑥	70～79 歳	63.2%
⑦	全 体	41.1%

(出典：スポーツ庁「スポーツの実施状況などに関する世論調査」(平成28年度))

今回調査した、ママさんバレーで活躍する女性たちの年齢を比較すると、はっきり違いがわかる。今回の「嘉悦杯」に参加してくれたママさんバレーの世代はまさに40歳代～50歳代が多く、続いて60歳代、30歳代と続く。40歳代についてはスポーツ庁のデータが低いのに対し、「嘉悦杯」出場のママさんバレーを行う40歳代の女子は競技の中でも中心となる世代となっている。ということは、社会全体として40歳代女子(20歳代～40歳代)のスポーツ実施率は低いが、ママさんバレーのような特定の競技によっては40歳代のスポーツ実施率は高くなる可能性がある。

ではなぜ、一般的な成人女子の20歳代～40歳代はスポーツの実施率が低いのか。スポーツ庁によれば、20歳代～30歳代については、「スポーツ実施の阻害要因は、仕事・家事・育児が多忙、面倒くさいなど」である。同様に、20歳代～40歳代も子どもへの教育等の費用負担などが加わって、中々スポーツ・運動ができない状況にあるのだろう。

今回の「嘉悦杯」の参加者の中で、40歳代が多いのは、「ママさんバレー」が楽しいと感じ継続するのはもちろん、プレーにおいても、技術面、精神面ともに充実していて、チームの中で中心的役割を担う、頼りになる存在だからと推測できる。「嘉悦杯」出場者からよく聞く話の中に、ある程度子育ては落ち着いているが、子どもがいても、仲間同士で子守りしながら練習できることや、幅広い年齢層がそろうので様々な相談がお互いにできるという。要は楽しいとか、やりがいを感じることに加え、何かしらのメリットが得られ、居心地の良さを感じられれば、スポーツを継続できるという可能性が生まれることが示されたといえる。健康のためにスポーツ・運動をすることが重要なことについて、現代人の多くは理解しているだろう。それでも仕事や子育て等で忙しい世代でもある20歳代～40歳代の女性はスポーツから遠ざかってしまう。今回、「嘉悦杯」参加者(「ママさんバレー」)には40歳代の比率が高かったが、「ママさんバレー」に限らず、他の種目で、かつ40歳代だけでなく、20歳代～30歳代のスポーツ実施率が増えるスポーツ種目があるかどうか、今後調査すべきところである。

スポーツ自体の魅力(条件)で成人女子の実施率が上げられなければ、他の方法で実施率を上げていかなければならない。まさに、スポーツ庁長官の鈴木大地氏が発表した「ライフステージに応じた活動の推進とその環境整備を行い成人週1回のスポーツ実施率を現在の約42.5%から65%までにアップすることを目指す」ことが重要となる(久我2017)。

4.3.2 子供のスポーツ習慣について

「第2期計画」の「第3章 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策」の中で、「学校体育をはじめ子供のスポーツ機会の充実による運動習慣の確立と体力向上」への言及がなされ、「自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う生徒を58.7%（平成28年度）から80%にすること。」「スポーツが嫌い・やや嫌いである生徒を16.4%（平成28年度）から8%まで半減したい」との目標が掲げられている。つまり、子供たちが運動・スポーツに興味をもち、自主的に体を動かしたいと思えるような環境づくりが重要なのである。子供たちを取り巻く環境として最も重要なのが家族である。ママさんバレーに限らず他種目でも、子供のスポーツ習慣に親のスポーツ習慣が影響するかどうか調査がなされる必要がある。そうすれば、子供のスポーツ・運動習慣をつけるためには、親自身が充実したスポーツライフを過ごすことが大切といえるかどうか示すことができるはずである。

5 まとめ

今回、開催から30年という節目で「嘉悦杯」に参加していただいた方々へアンケート調査を行い、嘉悦大学主催の「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」が、スポーツによる地域貢献といえるかを考察した。答えは前回（2007年調査）と変わらず、規模は小さくとも、継続し続けることで地域住民に認知され、楽しみにされ、そして出場を目標にされるスポーツ大会であることを示すことができた。10年の成果といえば、さらに大会レベルが上がったことである。そしていまだ変わらず、ママさんバレーの活動が盛んである地域の特性を活かし、その競技を「大会開催」という形で支援することも、地域貢献であると確認できた。大がかりな地域貢献はできなくとも、スポーツを楽しむ人々の活躍できる場を継続的に提供できることが重要といえる。

今回のアンケート調査から、ママさんバレーを楽しみにし、そして盛り上げてくれるのは40歳以上の成人女子が多く、さらに幅広い世代間で実施されていることがわかった。また、ひとりひとりの継続年数が長いことも明らかであった。「第2期計画」では、20歳代～40歳代というのはスポーツ（運動）から遠ざかる年代とみられているが、反対にその年代だからこそ、積極的に参加できるものもあるのではないだろうか。その可能性のあるスポーツの一つに「ママさんバレー」という競技があげられる。

今回のアンケート調査で、親（母親）がスポーツを行えば、子供にも影響を与えられる可能性も確認できた。子供にも生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現させるべく、地域における子供のスポーツ機会を充実させることが大切である。そのためにも、親の継続的なスポーツ・運動習慣もその一つの要因になりえる。

今回のアンケート調査と「第2期計画」が示すデータを参考に、「嘉悦杯」参加者（ママさんバレー競技者）の実態を確認することができた。このことはさらに、「嘉悦杯」が嘉悦大学の近隣地域におけるママさんバレーチームの活動を支える拠点であり続けてきたことの意義

が示されたといえる。一大学のスポーツイベント(大会)ではあるが、大学が持つ人的資源、物的資源を利用し、身近で、継続的に、確実に行われていけば、そこにスポーツに対する楽しさを感じる者、健康に興味を有する者が集まり、地域が活性化するのである。このことはまさに、現在国が目標とする「～スポーツが変える。未来を創る。Enjoy Sports, Enjoy Life¹⁸⁾」といえるだろう。

6 おわりに

嘉悦大学が30年継続している「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」は、大学が有する人的資源、物的資源を最大限有効に使い、継続的に行うことで大会の必要性が認知され、さらに競技者に求められる大会となった。結果として地域との絆ができ、お互いの協力関係も強くなっていく。つまり、大学のスポーツによる地域貢献の役目を果たし続けていることを今回のアンケート調査により示すことができた。

そしてさらなる地域貢献の役割として、「第2期計画」にある、「成人のスポーツ実施率」、「子供のスポーツ習慣」の向上も期待できる。「ママさんバレー」は高齢になっても、楽しみながら続けられるスポーツの一つである。また、幅広い年齢層が共にプレーできる。自分のスポーツライフが充実していれば、その家族にもスポーツと向き合うきっかけをつくる可能性が高まる。スポーツを楽しむ、あるいはバレーボールを愛好する成人女性が活躍できる機会を提供していると考えれば、「嘉悦杯」の地域貢献は新たな可能性を見出したことになる。今後も、大学のスポーツによる地域貢献として「嘉悦杯」がママさんバレーチームの活動を支える一拠点であり続けることに意義を見出し、そして新たな「スポーツによる地域貢献」の役割を担うことが望ましいことは言うまでもない。

謝辞

アンケート調査において、小平市、小金井市、武蔵野市、西東京市、府中市、八王子市、杉並区、板橋区、船橋市のママさんバレーチームの皆さんにご協力いただきました。また、「嘉悦杯」を30年継続するにあたり、ご尽力いただいた嘉悦学園・嘉悦大学・光風会、さらに、長年に渡り、運営面でご協力いただいた、小金井市の栗原栄子氏、武村友華里氏、武蔵野市の栗村武子氏、小平市の横尾則子氏に対し、深く感謝の気持ちを表すとともに心よりお礼申し上げます。

6. 皆さんのスポーツ習慣がご家族（夫・子供）に影響していると思いますか？
 ①大変影響している ②影響している ③どちらともいえない ④影響していない
 ⑤その他
 ()
7. 健康のため家族にもスポーツ（運動）を行ってほしいですか？
 ①強く思う ②そう思う ③どちらともいえない ④その他
 ()
8. ご子息、ご息女のスポーツ（運動）経験をお答えください。
9. その他（ご意見があればお願いします。）

注

- 1) 内閣府地方創生推進事務局「大学地域連携まちづくりネットワーク」の「1. 大学と地域に連携したまちづくりの取組の意義」では、「大学が地域にとってまちづくりを進める上で貴重な資源であり、パートナーである。」と指摘する。詳細は、首相官邸のHP (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/toshisaisei/03project/dai10/network.html>) を参照されたい。
- 2) そもそも大学が花小金井キャンパスに移転したとき、体育館も新築することになっていた。その際、当時より大学バレーボールにおいて女子バレーボール部が関東大学バレーボール1部リーグを維持する強豪校であったことも理由の一つである。
- 3) 参加者（チーム）が参加を数年待ちしている状況を作っている。継続年数が30年と長く、参加する地域も広範囲になると、参加希望チーム数も増えていく。毎年参加できず、数年待っていただく状況なので、一般的な地域の大会では対戦できないチームとの試合ができる。
- 4) 家庭婦人バレーボール、あるいはママさんバレーとも呼ばれる。現在、「一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟」として活動しているこの団体は、1979年（昭和54年）に「全国家庭婦人バレーボール連盟」として創設された。1964年（昭和39年）の東京オリンピック後、急速に全国に普及していくわけだが、活動実績としてはそれよりも前にあった。例えば「東京都バレーボール連盟」は2017年（平成29年）に50周年を、「杉並区バレーボール連盟」は60周年を迎えている。ママさんバレーは家庭を持つ女性が行うバレーボールを差すが、この参加資格については各地域の連盟や大会ごとによって様々である。必ずしも既婚や子持ちである必要はない。ルールについても以前は9人制ルールというのもママさんバレーの特徴だったが、現在では6人制の大会も増えている。さらに50歳以上限定の「いそじ大会」や、60歳以上限定の「ことぶき大会」などというカテゴリがあることも特徴的である。
- 5) 「嘉悦杯家庭婦人バレーボール30周年記念大会」は、平成28年（2016年）11月5日に開催された。主催は学校法人嘉悦学園、嘉悦大学社会連携委員会、協賛は光風会（同窓会）。協力は多摩バレーボール連盟、小平市バレーボール連盟、小金井市バレーボール連盟、嘉悦大学女子バレーボール部が行った。主催・協賛団体と、協力の女子バレーボール部は30年変わっていない。「30周年記念大会」として、過去10年（2006～2015年）の優勝・準優勝チームを招いたが、これは30年の中でも新しい試みであった。
- 6) 「東京都バレーボール連盟」によると、平成29年度家庭婦人バレーボールの加盟数は199チームである。「多摩バレーボール連盟」においては、通常のチームから、シニアなど複数の登録があり

正確な数を出せなかったが、今年度は、ママさんバレーで約 220 チームが参加している（平成 29 年度多摩バレーボール連盟 HP: <http://www15.plala.or.jp/tamaVB/>）。その年により 170~200 チームと変動がある。

- 7) 嘉悦女子短期大学バレーボール部（当時）は昭和 42 年創部、昭和 53 年には関東大学バレーボール 1 部リーグに昇格し、長くその地位を維持している。昭和 59 年に短期大学でありながら「全日本インカレ」優勝。現在まで（平成 13 年度より四年制大学）「全日本インカレ」優勝 6 回、「東日本インカレ」優勝 4 回、関東大学バレーボール 1 部リーグ戦春季リーグ優勝 2 回、秋季リーグ優勝 6 回。
- 8) 東京都の区域内には、基礎自治体として、23 区、（多摩市部）26 市、（西多摩郡）5 町、1 村がある。2001 年に保谷市と田無市が合併し西東京市となる。
- 9) そもそもスポーツ基本計画は、平成 23 年に制定されたスポーツ基本法第 9 条に基づき、文部科学大臣がスポーツに関する施策の総合的かつ計画的推進を図るために定めるものであり、同法の理念を具体化し、国、地方、公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体となってスポーツ立国を実現していく重要な指針となるものである。「第 1 期計画」においては、スポーツを通じ全ての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会の創出を目指し、7 つの政策目標に基づき、平成 24 年度から 5 年間に取組む施策を示したところである。「第 2 期計画」の策定にあたって、「第 1 期計画」の 7 つの政策目標に基づき、平成 24 年度から 5 年間に取組む施策を示した。
- 10) 「第 2 期計画」（答申）（平成 29 年 3 月 1 日 スポーツ審議会）参考データ集（出典：スポーツ庁「スポーツの実施状況などに関する世論調査」（平成 28 年度）の「成人の週 1 回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移」から（詳細は、スポーツ庁の HP: http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1381922.htm を参照）。
- 11) スポーツ基本計画の第 1 期では 8 個の数値目標が、第 2 期では 20 個に増えている。
- 12) 参考データ集（出典：スポーツ庁「スポーツの実施状況などに関する世論調査」（平成 28 年度）の「成人の週 1 回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移」から。
- 13) 70 歳以上の「おふく大会」に 84 歳の女性の参加があった（2016 年）。
- 14) 今回 20 歳代の出場は見られなかったが、この 30 年でいなかったわけではない。正確に調査していないが、20~30 年前のほうが 20 歳代の出場者は多かったと記憶する。今回の調査目的ではないのでデータを取っていないが、やはり女性の婚期や出産時期の変化、結婚後も仕事を続ける、育児・子育てで忙しいといった要因が 20 歳代の参加に関係していると予測できる。
- 15) 6 人制一般女子のネットの高さである 2m24cm（大学生女子や全日本女子も含まれる）と比較するとかなり低いことがわかる。
- 16) 「嘉悦杯家庭婦人バレーボール 30 周年記念大会」の開会式の際、「多摩バレーボール連盟」「小平市バレーボール連盟」「小金井市バレーボール連盟」そして「武蔵野市バレーボール連盟」それぞれより、大会を主催する嘉悦学園、嘉悦大学を表彰していただいた。嘉悦学園、嘉悦大学、光風会の支援と運営に携わる教職員、学生、そして地域を代表する役員の方、これらすべての力を集結した大会だからこそ、このような評価をいただいたといっても過言ではない。
- 17) 今までに、最後に優勝チームと嘉悦大学女子バレーボール部の試合をすることも考えたが、現在、学生たちが参加する公式試合は 6 人制ルールであり、ママさんバレーの 9 人制とルールが違うため、交流試合を行なわなかった。しかし、思いの外、参加者が楽しみにしていることがわかったので、今後、大会の内容をさらに充実させるためにも検討していきたい。
- 18) 「第 2 期計画」（答申）第 2 章「中期的なスポーツ政策の基本方針」

参考文献

- [1] 久我智也「ニッポンの健康向上『一億総スポーツ社会』で実現へ、ヘルスケア&スポーツ街づくり EXPO2017 報告 (1)」SPORT INNOVATORS Online (<http://techon.nikkeibp.co.jp/atcl/feature/15/070800035/031000029/?ST=SIO-bus> で参照可能、2017 年) 2017.5.3 閲覧
- [2] スポーツ庁「第 2 期スポーツ基本計画について」参考データ集 (http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm で参照可能、2017 年) 2017.8.10 閲覧
- [3] スポーツ庁「第 2 期スポーツ基本計画について（答申）」(http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/gaiyou/1382785.htm で参照可能、2017 年 3 月 1 日) 2017.8.10 閲覧
- [4] 星ひろみ「大学が果たす地域貢献のあり方についての一考察」『嘉悦大学研究論集』第 50 巻第 2 号 (2007 年) pp.113-130
- [5] 堀繁「スポーツのもつ可能性とまちづくり」堀繁、木田悟、薄井充裕編『スポーツで地域をつくる』（東京大学出版会、2007 年）pp.3-25

- [6] 光行淳子編『平成18年版 教育小六法』（学陽書房、2006年）
- [7] 文部科学省「スポーツ基本計画」（http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm で参照可能、2012年3月30日）2017.7.25 閲覧
- [8] 渡正「地域スポーツクラブの存立構造に関する一考察：地域と大学がもつ資源に注目して」『徳山大学論叢』第73号（2012年）pp.87-98

（平成29年10月9日受付、平成29年12月12日再受付）